目白大学　心理学研究
第６号　2010年　13－24

原著

大学生の職業決定と自我発達との関連
―心理学的な就職活動支援のための基礎研究―

目白大学心理カウンセリングセンター　土田　恭史
目白大学人間学部　平部　正樹
目白大学人間学部　田島佐登史
川村学園女子大学文学部　川原　正人

【要　約】
昨今の社会状況および大学における教育状況から鑑みて、進路選択および就職活動時の大学生に対する心理学的サポートを行うことは重要な課題である。本研究では、大学３年生の学生を対象として、アイデンティティの発達および職業未決定と就職活動状況の現状について把握するとともに、その関連について検討するための質問紙調査を行った。136名の学生に調査を実施し、117名の学生から回答が得られた。質問紙に用いた自我水準Ａ尺度の因子分析では、「決断力不足」「同一性拡散」「独立と依存のアンビバレント感情」の３因子が抽出され、職業未決定尺度では、「決定延期」「混乱」「模索」の３因子が抽出された。回答者を就職群と非就職群に分け、各因子と就職活動の程度との関連性および両群間の差を検討した。その結果、就職希望群では就職活動に直面する中で、自分の進路について、迷い混乱する気持ちが生じる傾向にあった。一方、非希望群つまり、就職することに迷っている、もしくは希望しない学生では、自分の将来を考えるにあたって、親からの分離・独立に関する葛藤を感じる傾向があるようであった。就職希望群と非希望群、それぞれの問題に応じたレベルでの心理学的サポートの必要性および可能性のあることが示唆された。

キーワード：職業決定、自我発達、心理学的支援、就職活動

１．問題と目的

日本における大学生の就職をめぐる環境は年々厳しさを増している。バブル経済崩壊以降、就職氷河期が続き、フリーターが増加した。また、経済情勢の影響を受けて、2008年秋頃から新規大学卒者の採用内定取消しという事態も生じている。このような中、進路の決まらないまま卒業する学生の存在が問題となっている。2007年に「キャリア教育等推進プラン」が策定され、多くの大学でも学生が主体的に進路を選択し、社会的に自立できるよう、大学生活のより早期からキャリア教育に力を注ぐようになってきている。

また、2009年の厚生労働白書（厚生労働省）では、2010年３月卒業予定の学生を対象とした採用活動の見通しとして、採用予定人数の減少が増加を上回り、厳選採用の兆しがみられるとされ、「若者が主体的に進路を選択する態度・能力を育成することが重要であり、そのためには、学校在学中から職業意識の形成を支援する取組みが重要である」と述べられている。

これらの一方で、大学もユニバーサル型の段階となり（トロウ，1998）、学生における基礎学力の低下や学習スキルの不足が指摘されている。その中で、職業意識の形成や就職活動にも困難を感じる学生が多いようである。約55％の学生が「前に踏み出す力」に不安を覚え、若者による就労支援機関へは「どうしていいかわか

らない」という相談が最も多く寄せられているという（ジョブカフェサポートセンター，2005；2006）。

このような状況の中で、職業意識に関連する概念として研究されてきているのが職業未決定である。下山（1986）は、職業未決定をアイデンティティの発達との関連から見ていく必要があると述べている。Erikson（1959）による心理社会的発達理論において、青年期後期はアイデンティティの確立が課題となる時期である。Eriksonは、アイデンティティの確立を職業決定と結びつけ、職業決定とその自己の在り方の受容をアイデンティティの確立と考えていた。大学時代はそれを選択するためのモラトリアム期として、自分の社会的役割を模索するための積極的な役割探索の時期という意味合いを持ちうる。

しかし、近年の心理社会的環境の変化に伴って、かつてより青年期の期間が延びてきていると指摘されてから久しい。現代の青年期後期は35歳ころまでとも言われ、決定や拡散を繰り返しながらゆるやかにアイデンティティが獲得されていく。その一方で年々、大学生の就職活動の開始時期は早まってきており、彼らは学生生活の早い段階で進路選択を求められるようになってきている。つまり、現代の青年は、早期の職業決定を求める社会的な要求にさらされる一方で、アイデンティティの発達が遷延化するというギャップのなかにあると考えられる。

下山（1986）は、職業未決定の中に、モラトリアム期を利用した積極的な職業探索状態から、消極的なアパシーまでが含まれるとしている。そして消極的・病理的な職業未決定状態の学生に対し、職業カウンセリング等の支援が必要であることを指摘している。また、下山（1985）、石谷（1999）も、学生相談において、進路選択・就職活動の問題を抱えた者の需要が多いことを報告している。進路選択・就職活動の問題を抱えた学生に対して、アイデンティティの発達の観点から、心理学的サポートを行っていくことが必要であることが伺われる。

進路選択・就職活動の問題に対する心理学的サポートの必要性、そしてその可能性を検討するためには、まず進路選択および就職活動中の学生の実態を把握しなければならない。そこで、本研究では、大学３年生の学生に対してアイデンティティの発達と職業未決定、就職活動状況の関連を調べるための質問紙調査を行った。前述したように、職業未決定には、積極的な職業探索状態から消極的なアパシーの状態まで、幅広いものとなっている。そこで本研究では、職業未決定を多面的に捉えることのできる、職業未決定尺度（下山，1986）を用いた。

職業未決定尺度は、職業意識に関連するさまざまな研究で用いられており（奥田ら，1998；吾妻ら，2003；山下ら，2003；竹内，2004；鹿内，2006）、そのデータが積み重ねられてきている。その一方で、アイデンティティの発達および職業未決定が、実際の就職活動状況にどの程度関連しているかを調べている研究は少ない。就職活動という実際の行動に結び付けるためにどのような心理的支援が必要か考えるためには、これらの関連を調べる必要があるのではないだろうか。

そこで本論では、アイデンティティの発達および職業未決定と就職活動状況の関連を検討し、進路選択および就職活動中の学生に対してどのような心理学的サポートが必要かつ可能であるかを検討する。特に、大学３年次に就職活動をする予定であるとする者と予定していない者との比較から、各々の特徴を明確にしていく。

２．方法

（１）　対象者

４年制大学に通う大学３年生。136名。

（２）　手続き

各３年次ゼミの担当教員に依頼をし、担当教員から対象者に質問紙を配布、その場で回答を求めた。なお、ゼミ担当教員は回答を見ず、実施と回収のみを行った。

（３）　調査時期

2009年７月10日～７月17日

（４）　使用した尺度

①就職活動に関するアンケート

就職活動に関連する指標として、就職希望の

有無と就職に向けて実際に行った活動について尋ねた。就職希望の有無は「はい」と「いいえ」で回答し、就職以外の進路を検討している場合はその内容について自由記述欄に回答を求めた。実際に行った活動については、就職を希望する際に取り組むことが多い活動23項目を選定した。これに自由記述欄のある「その他」を加えた24項目について、現在行っているものに丸をつけてもらった。丸をつけた数が多いほど就職に向けて幅広い活動を行っているものとした。

②青年期の自我発達上の危機状態尺度（A水準）

長尾（1989）は青年期の自我発達上の危機を２つの意味でとらえている。１つは、児童期までとは異なった心理状態が生じる発達上の「転換期」という意味と、もう１つは、不適応状態や精神医学的疾病に陥りやすい「危機の状況」である。この２つの危機状態は因果関係をもつが、その個人の置かれた状況や自我の強さによって、前者の危機状態にあっても後者の危機状態に陥らないものもいるとしている。そのため、青年期の自我発達上の危機状態尺度は発達上の転換期としての危機状態を測定するA水準と、不適応状態としての危機状態を測定するB水準から構成されている。

本研究においては、青年期の発達課題への決断が迫られる際に直面する危機状態が就職活動状況や職業未決定とどのように関連しているのか検討するために、発達上の転換としての危機状態を測定するA水準（26項目）を用いた。長尾の研究では、「決断力欠如」「同一性拡散」「自己収縮」「自己開示対象の欠如」「実行力欠如」「親とのアンビバレント感情」「親からの独立と依存のアンビバレンス」の７因子を抽出している。回答は５件法であり、「全くその通りである」を５点、「全くそうでない」を１点として得点化した。なお、項目中７項目は逆転項目であり、「全くその通りである」が１点、「全くそうでない」が５点となる。

③職業未決定尺度

下山（1986）は大学生の職業未決定について、積極的な職業探索状態から消極的なアパシー状態までその内容は多様であると述べている。本研究においては、大学生の職業未決定の実態を把握するため、さまざまな研究で用いられている職業未決定尺度を用いた。下山の研究では、「未熟」「混乱」「猶予」「模索」「安直」「決定」の６因子を抽出している。回答は３件法であり、「あてはまる」を３点、「どちらともいえない」を２点、「あてはまらない」を１点として得点化した。

３．結果

（１）　調査の実施状況

2009年７月中に117名からの回答が得られた（回答率86.0%）。性別は、男性25名、女性92名であった。平均年齢は20.84（SD = 1.66）であった。

今後の進路について、「就職する」と回答した者は81名（69.2%）、「就職しない」と回答した者は36名（30.8%）であった。「就職しない」と答えた者の大半は、大学院に進学することを希望していた。進路について男女差は見られなかった。

「就職する」と回答した81名について、現在の就職活動の進捗状況についてまとめたのがFig. 1である。これによれば、多くの学生が将来の職業について考え、友人や家族などに相談したり、インターネットで調べたりしているが、就職に向けた具体的な活動を行っている回答者はそれほど多くはないと思われる。具体的な活動として行われていることとしては、最も行われていたのが就職支援サイトなどの登録（64.2%）で、次いで自己分析（50.6%）、適職検査（34.6%）などであった。調査時期が３年次の前期ということもあり、多くの学生は具体的な活動をしておらず、自分自身の性格や適職などについて、身近な情報源をもとに考えている段階にあると思われた。

Fig. 2は、就職希望群における就職活動に関するアンケート調査の得点分布を示したものである。これによると最頻値は４で、全体の46.9%が２～６項目の間に分布していた。このことからも、就職を考えている大半の学生が、将来について友人や家族に相談したり、自己分析をしたりするなど、就職活動を実際に行う前の準備段階にいることが分かる。ただし、就職希望

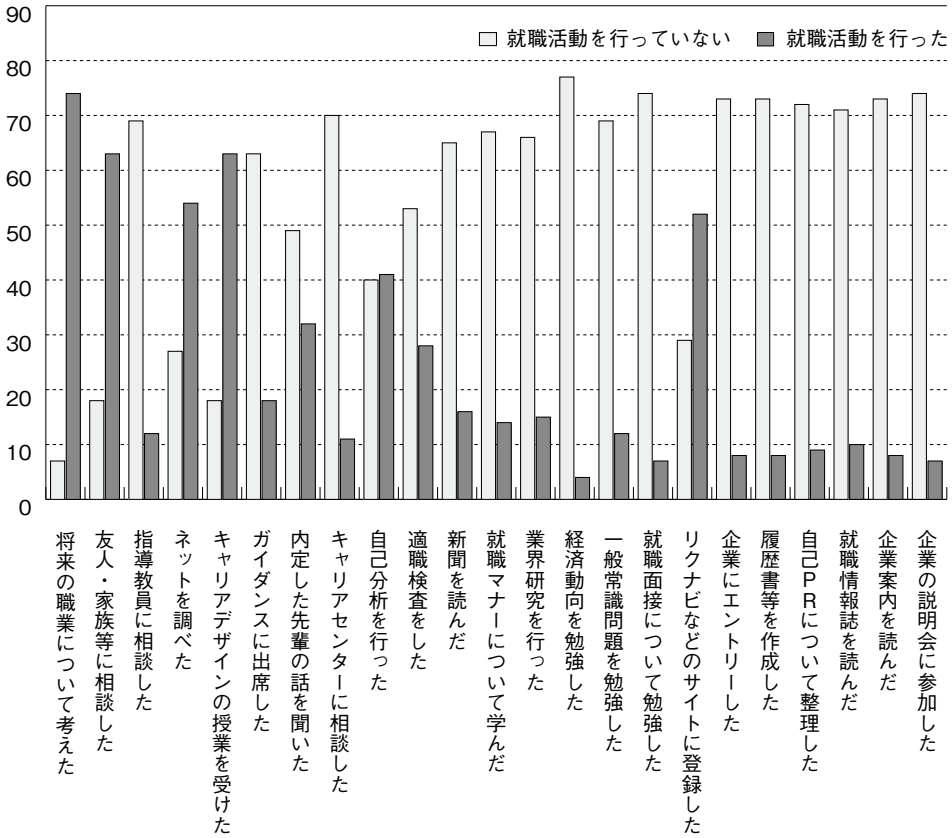

Fig. 1　就職活動の状況

群と非希望群で比較すると、就職希望群における就職活動の程度の平均が7.11（SD = 3.93）、就職非希望群における平均が3.38（SD = 3.06）であった。独立サンプルのｔ検定の結果、t（115）= 5.04で１％水準での有意な差が見られ、就職希望者が非希望者よりも就職活動を行っていることが示唆された。すなわち、就職希望者は準備段階ではあるものの、就職活動に向けて活動しようとする様子がうかがわれた。

しかし、自由記述の中でも、「自分が何になりたいのかまだ分からない」「就職といっても何をどうすればいいのか分からない」「どうすればいいのか教えてほしい」など、就職を前にして、就職することへの戸惑いや、自分の将来、自分がしたいことは何かといったことに直面して悩む様子がみられた。また、自由記述からは、社会的経済的な情勢や就職できるかどうかの不安よりも、自分がいったい何をしたいのかに悩む様子が多くうかがわれたことが特徴的であった。

（２）　就職活動と自我状態および職業決定との関連

分析を行うにあたって、自我発達上の危機状態尺度（A水準）と職業未決定尺度の原本で仮定されている因子間に高い相関がみられ、内容的に重なると考えられる因子があったため、これらの尺度を合成し、一つの尺度として最尤法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、５因子構造が得られた。各因子について検討したところ、尺度内の因子が一つの因子を構成していたが、尺度間では因子が別の一つの因子を構成することはなかったため、それぞれを個別の尺度として因子分析を行うことが妥当と判断された。

そこで、各尺度に対して最尤法プロマックス回転による検証的因子分析を行ったところ、どちらの尺度にも再現性はなく、因子構造についての再検討が必要と考えられた。そのため、自我状態の危機尺度及び職業未決定尺度につい

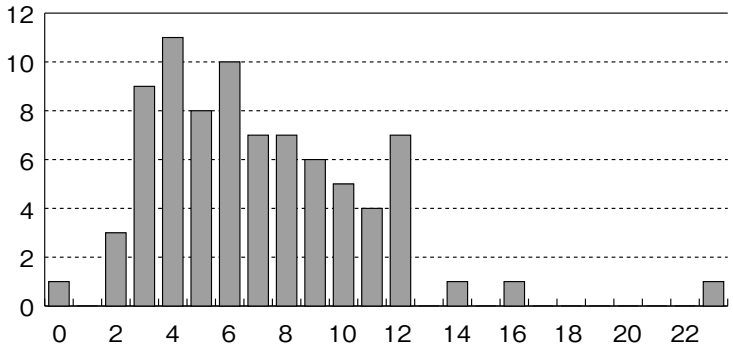

Fig. 2　就職活動の程度の分布

て、それぞれ最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。

まず、自我発達上の危機状態尺度（A水準）については、3因子20項目が得られた（累積寄与率＝32.36，df＝250，χ^2＝331.50**）（Tab. 1）。第1因子は、「大切な決断を迫られた場合、私はいつもじっくり考えた上で、思い切りよく決断できる（逆転）」「今、将来の進路についてはじっくり考えていてその決断ができる状態である（逆転）」「何でも物事を始めるのがおっくう（めんどう）だ」など決定や決断ができないことに関する項目であり、また原本における、決断力欠如を多く含む因子であったため、「決断力不足」と命名した（α＝.625）。第2因子は「今の自分は本当の自分でないような気がする」「人といっしょにいて、たまらなく自分がいやになることがよくある」「私の生活は、生き生きしているように思う（逆転）」など、今の自分が揺らぎ、自己受容できないでいる自我状態についての因子と考えられた。原本における同一性拡散に関する項目が因子を構成していたこともあり、「同一性拡散」と命名した（α＝.752）。第3因子は、「ひとりで決心がつきにくい時は、親の意見に従いたい反面、自分で決心したい気持ちもある」「私は、どのような職業にもつけるという気持ちになる時と何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある」など、原本の「親からの独立と依存のアンビバレンス」「親とのアンビバレント感情」の項目によって因子が構成されていた。独立と依存は親との間でまず果たされるものでもあることから、この因子を「独立と依存のアンビバレント感情」とした（α＝.722）。

次に、職業未決定尺度について因子分析を行った結果、3因子が得られた（累積寄与率＝35.98，df＝375，χ^2＝506.61**）（Tab. 2）。第1因子は「将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる」「できることなら職業決定は、先に延ばし続けておきたい」など、決定を先延ばしにする心性についての因子と考えられたため、「決定延期」と命名した（α＝.850）。第2因子は、「自分のやりたい職業は決まっており、今は、それを実現していく段階である（逆転）」「自分の知っている職業の中で、やりたいと思う職業が見つからない」など、職業選択における混乱状態の度合いを示すものと考えられたため、「混乱」と命名した（α＝.844）。第3因子は、「将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている」「職業は決まっていないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う」といった、自分の職業選択の方向を模索することに関するものと考えられたため、「模索」と命名した（α＝.690）。

どちらの尺度についても一定の信頼性が認められると考えられたが、自我水準尺度の第1因子および、職業未決定尺度の第3因子については若干信頼性が低い傾向にあった。しかし、尺度の解釈可能性および原本の構成概念の妥当性の観点から、この因子構造を採用し、以降の分析に用いた。（Tab. 3，Tab. 4）

まず、就職希望群と非希望群のそれぞれの就

Tab. 1　自我発達上の危機水準尺度（A水準）因子分析結果

	F１ 決断力不足	F２ 同一性拡散	F３ 独立と依存の アンビバレント感情
大切な決断を迫られた場合、私はいつもじっくり考えた上で、思い切りよく決断できる●	.711		
決断力があるため、今、何かの決定を迫られても混乱せず、決断できるだろう●	.704		
今、将来の進路については、じっくり考えていてその決断ができる段階である●	.647		
私は、悪い友だちに左右されることなく、いつも正しい決定を下すことができる●	.485		
今、自分の将来の進路について決定を迫られても何を基準にして考えたらよいかわからない	.480		
何でもものごとを始めるのがおっくう（めんどう）だ	.448		
これまで自分自身で将来や進路を決定した経験が少ないため、その決定を迫られると不安になる	.401		
今の自分は本当の自分でないような気がする		.711	
人といっしょにいて、たまらなく自分がいやになることがよくある		.651	
私の生活は、いきいきしているように思う●		.625	
うちとけて話ができる人は、私にはあまりいないように思う		.533	
私には、おたがいに本当に理解し合える人は、ほとんどいないと思う		.496	
他人から「仲間はずれにされている」と感じることはほとんどない●		.483	
今、何かに追いつめられているような感じをもっていて、自由に動けない気持ちである		.425	
ひとりで決心がつきにくい時には、親の意見に従いたい反面、自分で決心したい気持ちもある			.684
親の言うこと、考えていることは、正しいと信じられる反面、疑問も生じてくる			.646
親といると、いっしょにいるだけで何となく安心できる反面、自分をほうっておいてほしいという気持ちもある			.575
何かに迷っている時、親に「これでいい」と聞きたい反面、聞かないで自分で解決したいと思う			.473
私には「理想の自分」がたくさんあって、どれが本当になりたい自分なのかさっぱりわからない			.444
私は、どのような職業にもつけるという気持ちになる時と何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある			.410
うれしいこと、楽しいことは、まず親に報告したい気持ちもある反面、そのことを自分だけで大切にしたい気持ちもある			.405
α＝	.625	.752	.722
説明率	19.49	6.84	6.03
累積寄与率			32.36

●は逆転項目　　df = 250,　$\chi^2 = 331.50^{**}$

Tab. 2　職業未決定尺度因子分析結果

	F 1 決定延期	F 2 混乱	F 3 模索
将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる	.671		
これまで、自分自身で決定するという経験が少なく、職業決定のことを考えると不安になる	.596		
今の状態では、自分の一生の仕事などみつかりそうもない	.591		
できることなら職業決定は、先に延ばし続けておきたい	.589		
できることなら誰か他の人に自分の職業を決めてもらいたいと思うことがある	.553		
自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている	.516		
せっかく大学に入ったのだから、今は職業のことは考えたくない	.510		
職業につけたとしても、うまくやっていく自信がない	.500		
将来の職業については、考える意欲が全くわかない	.471		−.406
誤った職業決定をしてしまうのではないかという不安があり、決定できない	.468		
自分の将来の職業については、何を基準にして考えたらよいのかわからない	.446	.356	
できることなら、職業など持たず、いつまでも好きなことをしていたい	.423		
将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない	.405		
私は、いつも自分で実現できないような職業ばかり考えている	.392		
職業のことは、大学４年生になってから考えるつもりだ	.390		
職業決定と言われても、まだ先のことのようでピンとこない	.368		
自分のやりたい職業は決まっており、今は、それを実現していく段階である●		−.957	
自分なりに考えた結果、最終的にひとつの職業を選んだ●		−.762	
自分の職業計画は、着実に進んでいると思う●		−.672	
自分の職業決定には自信を持っている●		−.593	
自分の知っている職業の中で、やりたいと思う職業がみつからない		.494	
自分がどのような職業に適しているのかわからない		.475	
自分の職業については、いろいろ計画をたてるが、一貫性が無く、次々に変化していく		.473	
自分が職業としてどのようなことをやりたいのかわからない		.466	
将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている			.612
職業は決まっていないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う			.537
私は、あらゆるものになれるような気持になる時と、何にもなれないのではないかという気持になる時がある			.520
望む職業につけないのではと不安になる	.362		.518
職業に関する情報がまだ充分にないので、情報を集めてから決定したい			.490
自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない			−.441
これだと思う職業がみつかるまでじっくり探していくつもりだ			.438
α =	.850	.844	.690
説明率	23.55	7.63	4.80
累積寄与率			35.98

●は逆転項目　　df = 375,　$\chi^2 = 506.61^{**}$

職活動の進捗度合いと、自我状態および職業未決定との相関を求めた。その結果、就職群では就職活動と職業未決定尺度の「混乱」の間に有意な正の相関が見られた（r = .251*）。一方、非就職群では、自我状態尺度の「独立と依存のアンビバレント感情」との間に中程度の正の相関（r = .426**）が見られた。自我状態についてはこれとは対照的に、両群ともに共通して、自我状態尺度の「決断力不足」と、職業未決定尺度の「決定延期」と「混乱」との間に有意な強い負の相関が得られた。決定延期や混乱状態にある者は決断力不足を感じる度合いが低い傾向にあるようであった。

相関係数より就職希望群・非希望群の進路選択に影響する要因に違いがあると考えられたため、両群の自我状態および職業未決定意識について、t 検定による比較を行った（Tab. 5）。その結果、自我状態尺度においては「決断力不足」（t（112）= 2.877, p<.01）に、職業未決定尺度では「決定延期」（t（114）= 2.548, p<.01）、「混乱」（t（113）= 4.578, p<.01）、「模索」（t（115）= 2.531, p<.01）の３因子すべてに有意な差が見られた。「決断力不足」は就職希望群の方が非希望群に比べて有意に得点が高かったが、職業未決定尺度の３因子については、いずれも非希望群のほうが有意に高かった。

Tab. 3　就職希望群の就職活動と各尺度の相関係数（n＝81）

	就職活動の程度	決断力不足	同一性拡散	独立と依存のアンビバレント感情	決定延期	混乱	模索
就職活動の程度							
決断力不足	−.121						
同一性拡散	.210	.279*					
独立と依存のアンビバレント感情	.097	.088	.334**				
決定延期	.082	−.602**	−.384**	−.296**			
混乱	.251*	−.598**	−.033	−.096	.548**		
模索	−.207	.142	.041	−.485**	.065	−.006	

*：p<.05,　**：p<.01

Tab. 4　就職非希望群の就職活動と各尺度の相関係数（n＝36）

	就職活動の程度	決断力不足	同一性拡散	独立と依存のアンビバレント感情	決定延期	混乱	模索
就職活動の程度							
決断力不足	−.036						
同一性拡散	−.015	.585 **					
独立と依存のアンビバレント感情	.426 **	.372 *	.315				
決定延期	.002	−.713 **	−.548 **	−.479 **			
混乱	.019	−.726 **	−.515 **	−.229	.661 **		
模索	−.152	.022	.078	−.239	.070	.243	

*：p<.05,　**：p<.01

Tab. 5　就職希望群と非希望群の各尺度のt検定

	就職希望（81）		就職非希望（36）			
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	df	t
就職活動	7.00	3.72	3.33	2.94	115	5.224 **
決断力不足	22.63	5.11	19.60	5.38	112	2.877 **
同一性拡散	20.25	6.13	19.86	5.33	111	0.324
独立と依存のアンビバレント感情	23.54	4.71	21.58	6.64	113	1.811
決定延期	31.30	6.96	35.03	7.87	114	2.548 **
混乱	13.11	3.79	16.83	4.55	113	4.578 **
模索	10.35	2.36	11.89	4.21	115	2.531 **

** : p<.01

４．考察

近年の雇用環境の変化によって、就職活動は自分の一生を決めるものという意識は薄らいでいるが、アイデンティティ形成の途上にある大学生にとって、進路決定は社会的な側面だけでなく、心理学的にも大きな出来事である。本研究では、就職あるいは進路に向けた活動とアイデンティティの関連を検討することにより、これから就職活動が本格化する大学３年生を対象とした就職活動支援における心理学的サポートの可能性について検討した。

（１）　進路選択及び就職活動の状況

まず、就職活動の進捗状況であるが、３年次前期においては、就職にむけた具体的な活動はあまりなされない傾向にあるようである。この時期においては、どのような職業に就くか、自分は何になりたいのかなどに悩み、身近な友人や家族に相談したり、可能な範囲で情報を集めようとする活動が中心であることがうかがわれた。調査の結果、多くの学生は積極的に就職活動に踏み込んでおらず、これから自分はどうするべきかといった、自己の在り方について悩む段階にあると考えられる。ただし、この傾向は就職を希望する／しないに関わらず、どの学生にも見られるものであった。

しかし、就職活動については、就職を希望する／しないの意識の違いに、アイデンティティの危機や職業決定に関する態度が大きく関わっていることがうかがわれた。調査の結果によると、就職すると回答した学生は、就職活動が進むにつれて社会に出なければならないと実感するが、実際に情報を集め就職活動をすることで現実の自分を見つめることになり、逆に「自分は何をしたいのか」など将来の自己像について悩むのだと思われる。それによって、「混乱」するのではないかと考えられた。

これとは対照的に、「就職をしない」と回答した群は、大半が大学院への進学を希望していたが、多くはそうした進路決定に際して、親との間に心理的葛藤を感じていることがうかがわれた。とりわけ、親に対するアンビバレントな気持ち――わかって欲しいけれどわかってもらえない、親に相談したいが自分で決心したいなどを抱くようである。この背景の一つには、就職を巡る親子の認識の違いがあろう。例えば平尾（2004）は、子どもの進路について、３年次の４月頃には９割の親子が何らかの形で話しあうが、子どもが大学院に進学することについて７割の親が否定的な意見を持っていることを指摘しており、就職しないことを選択することで、両親との意見の齟齬が生じやすくなり、葛藤しやすい状況にあると考えられる。このような葛藤の中で、就職しないとしながらも就職活動を試みるものもおり、自分の進路が揺らぐこともあるようだ。高橋（2008）の他、日本経済新聞の特集記事（2002, ２月14日夕刊）などにもあるように、「就職をしない」という選択には、

「就職する」こととはまた違った葛藤が伴うことが本研究でもうかがわれた。

（２）　アイデンティティの発達および職業未決定と就職活動の状況

また、就職する／しないという進路選択の背景には、職業についての意識とアイデンティティが関連しているのではないかと考えられる。各因子についてのｔ検定の結果、有意差の見られたものとしては、「決断力不足」「決定延期」「混乱」「模索」であった。このうち、「決断力不足」は就職希望群で有意に高く、「決定延期」「混乱」「模索」は非希望群で有意に高かった。「決断力不足」が就職希望群に有意に高かったことについては、就職活動を通じて、自分はこれからどうしたいのかと考える機会が多くなる分、直面しやすい問題なのではないかと思われた。

その一方で、非希望群の学生の方が「決断力不足」が低く、「決定延期」「混乱」「模索」が高いというのは興味深い。「どうしてよいかわからない」ために、進路が決定できていないと感じているのはどちらの群でも見られたが、就職希望群では職業未決定との有意な相関がなかったことから、非希望群は、職業意識に混乱が見られやすい可能性がある。進学を決めているものでもこの点は変わらない。「決定延期」が高いことからも、非希望群は、積極的に就職をしないのではなく、自分のこれからについて迷っているものも含まれているとする下山（1986）の指摘に、よく似た知見が得られたといえるだろう。進学は進路のひとつの選択ではあるが、その選択によって、未決定状態が解消されるのではないようである。その意味では進学もまた職業未決定を維持させる面があるのであろう。また、これに伴って進路の未決定が親との葛藤を強化するのは前述の通りである。

（３）　就職活動に対する心理学的サポートの必要性および可能性

これらの結果を踏まえ、学生の就職活動のサポートとしての心理学的サポートの方向性について考察する。就職を選択した学生もそうでない学生もそれぞれが葛藤を持っているということは論を待たない。これに対して、カウンセリングによる心理学的サポートは就職活動支援として有効なものであると考えられる。

ただし本調査では、こうした全体的な傾向とは別に、就職することによる葛藤、就職をしないことによる葛藤にそれぞれ特徴があること示唆された。このことから、学生の進路選択に応じたサポートの構築が必要となる。

まず、就職をするとした学生についてである。就職活動を行っていく中で、彼らは現実に直面し、自分が決めた進路について繰り返し迷うのであろう。自分が決めた進路はこれで良いのか、自分は何がしたいのかといった、自分の選択が正しかったのかどうかといった職業決定をすることについての悩みが付きまとうことがうかがわれた。しかし、自我の危機的状況にあるわけではないので、青年期後期の達成課題である、職業決定をしていくことをどのように自ら引き受けていくのかということに対するサポートが重要なのではないかと考えられる。

その一方で、就職に迷う学生や、就職をしないとしている学生のなかには、下山（1986）の指摘するように積極的に就職活動をしないと決めているわけではなく、分離・独立の葛藤が強く、進路を決められないなど、就職することに消極的であったり、進路の決断を自ら積極的に引き受けることに困難を感じている者がいることが考えられる。また、就職をせず、進学をする場合には、親の進路観との違いから、進路選択を認めてもらえずに葛藤的になる場合もあり、個人の自我発達だけでなく、家族関係にも焦点を当てる必要が出てくる場合もあることが予想される。つまり、職業決定に関する問題よりもむしろ、自己のありかたや、親からの独立といった思春期的な問題をはらんでいる可能性があり、就職活動に伴う現実的な問題に関する対処だけでなく、その人の抱えるより全体的な心理的問題にも留意したサポートが有効なのではないかと考えられた。

本研究の意義と限界

本調査の結果から、学生は進路の決定という大きな出来事を前に、「自分が何をしたいのか」「これからどうすればいいのか」と迷い、揺れ動

いていることが明らかとなった。その一方で、就職を希望する学生と、希望しない学生との間で、職業意識や自我状態の危機に違いが見られた。就職活動の心理学的サポートとして、学生の持つ葛藤に寄り添うことが重要であり、かつ、就職をするかしないかによって、サポートのニーズが異なることが示唆された。

本調査の課題としては次の３点が考えられる。まず、調査時期が３年次前期であったため、大半の学生が本格的な就職活動を行っておらず、学生の就職活動状況を十分に反映しているとはいいがたい。この点については、また時期を改めて調査を行う必要があるものの、その一方で就職活動が本格化していく目前の時期に調査を行った意義はあると考えられる。就職活動の準備期ともいうべきこの時期をはじめに、就職活動を実際に始めた時期、本格化した時期など、各時期において調査を行い、その変遷を検討することも必要であろう。また、調査対象については、１大学の3年次生のみと任意で選択したため、偏りがないとは言えない。さらに調査回答者は、その一部の進路探索に意欲的な学生である可能性もあり、現代学生の就職活動の実態を十分に反映できたとは言い切れない。そのため実態をより把握するために、調査の時期、対象などについても検討し、今後更なる調査が望まれる。

【引用文献】

吾妻ゆみ・田中香織・中島直美・原田加奈子・稲富宏之・田中悟郎・太田保之（2003）女子大学生の職業選択における意志決定に関わる要因，長崎大学医学部保健学科紀要，16（2），pp.103−109

Erikson, E. H.（1959）Identity and the life cycle, International Universities Press（小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子訳（1973）自我同一性，誠心書房）

平尾元彦（2004）大学生の就職活動に関する親の意識：山口大学３年生の保護者アンケート調査，大学教育，1，pp.103−113

石谷真一（1999）面接継続回数から見た学生相談臨床の特徴，17（3），pp.261−272

ジョブカフェサポートセンター（2005）ジョブカフェ・キャリアカウンセラー調査

ジョブカフェサポートセンター（2006）若者の就職活動に関する調査報告書

厚生労働省（2009）平成21年度版厚生労働白書

マーチン・トロウ（1998）高等教育におけるユニバーサル・アクセスの現代的意味，現代の高等教育，402，pp.74−80

長尾博（1989）青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み，教育心理学研究，37，pp.71−77

内閣府キャリア教育等推進会議（2007）キャリア教育等推進プラン―自分でつかもう自分の人生―

日本経済新聞（2002）親子氷河期・変わる就職模様（上），２月14日夕刊

奥田弘恵・祖父江育子（1998）「看護学生の職業未決定について」―職業未決定尺度の下位尺度作成による検討―，京都大学医療技術短期大学部紀要，18，pp.9−14

鹿内啓子（2006）大学生の職業未決定に関わる要因の検討：未決定型による比較，北星学園大学文学部北星論集，43（2），pp.133−148

下山晴彦（1985）来談者の職業未決定について―個人面接の観点から―，東京大学学生相談所紀要，４，pp.21−30

下山晴彦（1986）大学生の職業未決定の研究，教育心理学研究，34（1），pp.20−30

高橋彩（2008）大学生における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連―大学進学時と就職活動期の比較―，総合政策学会総合政策研究，11，pp.27−42

竹内美香（2004）『入門・心理学』教授法に関する一試論（その３）―キャリア・ガイダンスと青年期の自我同一性形成の扱い方―，産能短期大学紀要，37，pp.61−95

山下利之・河野康成・葛原茂一郎（2003）大学生の職業未決定をもたらす心理的要因の組み合わせに関する質的比較分析，日本教育工学雑誌，27，pp.85−88

Association between vocational decision-making and ego development of university students

—basic study on psychological support for job hunting—

Takashi Tsuchida　Mejiro University, Psychological Counseling Center
Masaki Hirabe　Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Satoshi Tajima　Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Masato Kawahara　Kawamura Gakuen Woman's University, Faculty of Literature

Mejiro Journal of Psychology, 2010 vol.6

【Abstract】

The purpose of this study was to grasp the present situation of ego development, vocational indecision and job hunting about the university students and to examine their relationships. We conducted a questionnaire survey for university 136 students in grade three. By factor analysis the items of Ego developmental Crisis State Scale were divided into 3 factors named as "irresolution", "identity diffusion" and "ambivalence about independence". Also the items of Vocational Indecision Scale were divided into 3 factors named as "postponement of decision", "confusion" and "exploration". We divided respondents into two groups named as "job hunting group", "not job hunting group" compared them. The results were that students who decided to hunt job felt the anxiety and postponed the vocational decision while faced job hunting. Meanwhile, students who would not hunt job or did not decide yet felt the conflict of independence from parents. Therefore, it was suggested there were needs and possibilities of psychological supports according to the level of their problems.

keywords : vocational decision-making, ego development, psychological support, job hunting